

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02084

研究課題名(和文) 近世から近代にかけて浄土教とキリスト教の交流史における後生観と救済観

研究課題名(英文) Views on the Afterlife and Salvation as Reflected in Pure Land Buddhist and Christian Dialogue during the Early Modern and Modern Periods in Japan

研究代表者

James BASKIND (Baskind, James)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：50455226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は江戸初期から明治末にかけての浄土系仏教とキリスト教との相互理解・交流史や社会情勢を背景に近代日本の霊魂・救済・後生・倫理のそれぞれの観念や言説形成を検討してきた。研究期間の業績はこれらのテーマを反映し、細かい論述で発展させていくものである。The Myotei Dialogues: A Japanese Christian Critique of Native Traditionsは江戸初期の仏教・キリスト教の交流史の全体像を提示する中で、主な言説である後生観・救済観・善悪問題・倫理問題を考察しているのである。他の業績はそれぞれの言説を取り上げ、より細かく検討する。

研究成果の概要(英文)：This research examines the discourse formation and the conceptual history of central ideas such as the soul, salvation, the afterlife, and ethics in Pure Land Buddhist and Christian exchange from the early modern to modern period in Japan. The published results of this research reflect and expand upon these themes. For example, “The Myotei Dialogues: A Japanese Christian Critique of Native Traditions” looks at the Buddhist-Christian exchange on the macro level, treating the themes enumerated above. The other published during the period of research (see list of publications below) take up each theme and treats them in greater detail.

研究分野：宗教学

キーワード：浄土教 キリスト教 後生観 救済観 江戸時代 明治時代

1. 研究開始当初の背景

近年の研究の一つの軸は、江戸初期の佛教とキリスト教の交流史であり、その中心として不干斎ハビアンと『妙貞問答』であった。ハビアンの『妙貞問答』の第一巻は、佛教を取り上げ、批判を加えるものであるが、佛教を批判する主な論点は、佛教が「空」に基づいているため、後生の助けにならないということである。特に興味深いのは、浄土教を論破する際、他の佛教宗派の中で、浄土教ほど後生を否定する宗派はないとまで断言する。浄土教という呼称に見られるように後生の場所である「浄土」という言葉自体が宗派の名前にあることなら、どのようにして後生がないと断言できるのだろうか興味深く思い、江戸期の浄土教とキリスト教のそれぞれの後生観を研究対象となってきた。さらにこれをきっかけに、研究テーマが江戸から明治の開国以来の時期に移り、当時の浄土教・キリスト教の交流史におけるそれぞれの靈魂観、後生観の言説を検討することは中心課題となったのである。

2. 研究の目的

江戸初期から明治末にかけての浄土系仏教とキリスト教との相互理解・交流史や社会情勢を背景に近代日本の靈魂・救済・後生・倫理のそれぞれの観念や言説形成を検討する。明治になると、浄土教とプロテスタントキリスト教との交流が盛んになり、輸入された比較宗教論・19世紀の科学・進化論思想などが絡み合い、新たな宗教言説・形成が生まれた。具体的な方法としては、浄土教側とキリスト教側両側の顕著な人物やその著作情勢を背景に、近代日本人の救済観・他界観とかかわる靈魂観や倫理観の形成史と現代の思潮との関係性を究明する。

3. 研究の方法

本研究は文献研究であり、方法としては以下の通りである。

本研究の主な目的は、江戸初期から明治期にかけて浄土系佛教とキリスト教の相互理解を取り上げる中、

江戸初期と明治初期の時に、どのように浄土系佛教の靈魂観、後生観、救済観のそれぞれの言説がキリスト教の来日・普及によって語り直されたのか

明治期に渡欧・渡米する佛教者と主にプロテスタントキリスト教宣教師が比較宗教論や19世紀の科学・進化論思想の受容によってどのように浄土教の後生観・靈魂観が変容してきたのか

上記の成果を踏まえた上、浄土系佛教とキリスト教との交流が近代・現代の日本人の救済

観・他界観・倫理観においてどのような影響・役割を果たしてきたのか

について解明することを全体構想としている。本研究は単独研究である。

<平成27年度>

初年度である27年度は、江戸初期のイエズス会の論駁書作成を含めた布教活動と鈴木正三と雪窓宗崔のキリスト教への論駁書などを検討し、当時の日本人佛教者が第一接触の時にどのようにキリスト教を解釈・論駁することとともに、その刺激で新たにどのように日本の伝統思想の一部である佛教を解釈し直したかということ考察しながら、その言説を明らかにする。鈴木正三の『破吉利支丹』や雪窓宗崔の『対治邪執論』に見られるように、日本人佛教者がキリスト教ならではの神教の教理などを佛教的な枠で解釈しながら論破・論駁に当たっていく。江戸初期のキリスト教への論駁するのは主に禅宗の僧侶だったが、明治に入り、プロテスタントキリスト教宣教への論駁の先頭に立っていたのは、浄土教系、主に浄土真宗大谷派の僧侶、在家の佛教者となってきた。この近世の浄土教とキリスト教との相互理解・解釈・言説形成を解明する先行研究としては、海老沢有道の「キリスト教と日本宗教との交渉総説」(1978)、藤吉慈海の「鈴木正三の思想」(1978)と「鈴木正三とキリスト教」(1979)、井手勝美の「ハビアンと妙貞問答」(1978)と『キリシタン思想史研究序説-日本人のキリスト教受容-』(1995)、Kiri Paramore *Ideology and Christianity in Japan* (2009)、釈徹宗の『不干斎ハビアン 神も仏も棄てた宗教者』、そして末木文美士の『近世の佛教-華ひらく思想と文化』(2010)と「日本の個性・宗教で読み解く日本の歴史」(2011)と『妙貞問答を読む-ハビアンの佛教批判』などがある。本研究は、この先行研究を踏まえながら、江戸初期のキリスト教と浄土教に焦点を絞り、その後生観・救済観・靈魂観・倫理観の言説形成史がどのように明治期の言説と影響・関係しているのかということを取り上げ、明治期のキリスト教と浄土教との交流史へと導入していく。

<平成28年度>

二年目の平成28年度は、明治期の浄土教系と新たに来日したプロテスタントキリスト教の宣教師との交流史に移っていく。英語での最大の先行研究としては、Notto R. Thelle氏の *Buddhism and Christianity in Japan: From Conflict to Dialogue, 1854-1899* である。この研究書は我々の明治期における佛教とキリスト教との交流史の理解へ大きく貢献しており、このテーマの立派な入門書である。多くの当時のテキストを紹介する中、その中身を触れるが、持続的な検討を欠けてい

る。本研究ではより綿密、より深い検討を加え、多くの文献の現代語訳、英訳によって、国際学会で紹介するとともに、そのキリスト教側、佛教側の論破方法や論点を明らかにし、当時の盛んに輸入されていた西洋哲学思想や科学思想、政治的情勢の有り様との関連を解明していく。そのため、最初に佛教側からのキリスト教への論駁書を取り上げる。少しの用例だけを挙げれば、田島象二の『耶穌教意問答』(1875)、島地黙雷の『問対略記』(1877)、森脇菅吉の『釈迦耶穌争論之裁判』(1881)、青柳高輅の『馬太伝弁謬』(1882)、本田瑞園の『耶穌教審判』(1888)、西方貫道の『仏法曉鐘歌』(1889)、村上专精の『安心立命談』(1890)、田島教恵の『佛耶血戦』(1894)などがある。佛教側のキリスト教をめぐる言説を具体的に把握してから、キリスト教側の佛教への論駁書、キリスト教の護教書を取り上げる。いくつかの例とえば、高橋五郎編『基督教及佛教』(1891)、ゴルドン(M.L. Gordon)の『弥陀物語』と『佛教頼むに足らず』などのようなテキストがある。このような話は、欧米の宣教師がどのように浄土教を見てきたというテーマを扱い、浄土教や阿弥陀をめぐるオリエンタリズムの領域になる。この欧米人の浄土教・阿弥陀物における姿勢を解明した先行研究としては、Galen Amstutzの *Interpreting Amida* (1997)がある。明治期における両側のそれぞれの後生観、救済観、靈魂観、倫理観などの言説を検討した上、それぞれの言説の近現代の位置づけを解明する。これが最終年度の研究計画に導いてくれる課題である。

<平成29年度>

最終年度の29年度は、明治期中に佛教とキリスト教の間に行われた論争・交流・受容を背景に、戦後から現在までのキリスト教と浄土教の位置づけをとりあげ、近現代日本人の後生観・救済観・靈魂観・倫理観の進化し続けている相互関係を検討する。明治期に入ってきた西洋哲学、科学思想、比較宗教論などによって、浄土教における極楽浄土観がどのように変容してきたことも研究範囲に入れ、考察していく。例えば、日本浄土宗、浄土真宗の浄土を解釈する主な枠である「指方立相」(十萬億仏度の彼方にある実体的な西方極楽浄土のこと)と「唯心浄土」(心の中にしか浄土が存在しない説)の語り方がどのように変遷してきたかということと、現在の浄土宗、浄土真宗でどのように語られているのかということも検討することが研究計画の集結課題となる。

4. 研究成果

本研究は江戸初期から明治末にかけての浄土系仏教とキリスト教との相互理解・交流

史や社会情勢を背景に近代日本の靈魂・救済・後生・倫理のそれぞれの観念や言説形成を検討してきた。研究期間の業績はこれらのテーマを反映し、細かい論述で発展させていくものである。The Myōtei Dialogues: A Japanese Christian Critique of Native Traditions は江戸初期の仏教・キリスト教の交流史の全体像を提示する中で、主な言説である後生観・救済観・善悪問題・倫理問題を考察しているのである。他の業績はそれぞれの言説を取り上げ、より細かく検討する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

James Baskind

“The Pure Land Is No Heaven: Habian's Myōtei Dialogues, Valignano's Japanese Catechism, and Discourse on the Afterlife during Japan's Christian Century” *History of Religions* vol. 57, no. 3 (February 2018), pp. 229-269.

ジェームズ・バスキンド

海を渡った日本の姫君の行方-黄檗僧独湛性瑩の『当麻寺化仏織造藕糸西方聖境図説』と中国における当麻曼荼羅・中将姫伝説の一考察 (“The Obaku Monk Dokutan Shōkei's *Taimadera kebutsu shokuzō gōshi shōkyō zusetu* and a Consideration of the Taima Mandala and Chūjōhime Legend in China”) 日本仏教総合研究 (Association for the Interdisciplinary Studies of Japanese Buddhism) 第14号 (2015年度号), May, 2016, pp. 153-175.

(書籍の章4件)

James Baskind

“Kiyu Dojin: Laughing at Christianity: A Commentary and Translation” *Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan* (近刊)

ジェームズ・バスキンド

「キリスト教から見た日本の宗教-日本から見たキリスト教」

『シリーズ「日本の宗教」』(近刊)

ジェームズ・バスキンド

“The Myōtei Dialogues in Early Edo Thought” co-authored with Richard Bowring, in Baskind and Bowring, *The Myōtei Dialogues: A Japanese*

Christian Critique of Native Traditions, NUS series Brill, Leiden, pp. 3-15.

James Baskind

“Emptiness and Nothingness in Habian’s Critique of Buddhism” in Baskind and Bowring, *The Myōtei Dialogues: A Japanese Christian Critique of Native Traditions*, NUS series Brill, Leiden, pp. 16-30.

〔学会発表〕(計2件)

〔図書〕(計1件)

James Baskind

The Myōtei Dialogues: A Japanese Christian Critique of Native Traditions. NUS series Brill, Leiden. Co-edited with Richard Bowring, 2015.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

ジェームズ・バスキンド (James Baskind)
名古屋市立大学・人間文化研究科・准教授

研究者番号：50455226

(2)研究分担者

単独研究である ()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

なし ()